

「日本3.0」

Vol.4

グローバル化という幻想

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

今後の世界と日本を見据える上で、重要なキーワードとなるのが「グローバル化」です。

私自身、過去15年にわたり、経済・ビジネス分野の記事を書いてきましたが、ビジネスの現場において「グローバル化」という言葉を聞かない日はありません。

「グローバル化しないと企業は生き残れない」「英語を学びグローバル人材になれ」といった言葉が吹き荒れていま

しかし、本当にグローバル化はそれ

ほど進んでいるのでしょうか。2013年時点のデータを見て検証してみましよう。

「情報」と「マネー」という面では、確かに世界はグローバル化しています。たとえば、世界の株式投資のうち4

割弱が国を超えて行われていますし、インターネットのトラフィックのうち2割弱が国境を超えたものです。

しかし、「人」に視点を移すと、その構図は一変します。

国境を超えて移民する人の比率は約3%、留学する人の比率は約2%にすぎません。国外に旅行する人の比率は16%程度に上りますが、その行き先の大半は近隣諸国です。

つまり、今のグローバル化とは「頭でっかちのグローバル化」なのです。ネットなどの情報を通じて、世界とつながったつもりになっただけで、そこに身体性はありません。頭はグローバル、体はローカルといういびつな構造になっているのです。

今後、VR(仮想現実)、AR(拡張現実)といったテクノロジが進化することで、頭と身体が融合していくかも

しれませんが、リアルとバーチャルの差は残っているでしょう。

このコラムで私が言いたいのは、「グローバル化はそんなに進んでいないし、これからは必要ない」ということではありません。

日本の繁栄のためにも、TPPは必要ですし、各界のリーダー、リーダー候補はどんどん世界に出て行くべきですし、観光業など仕事で英語が必要な人はしっかり英語を勉強すべきです。

ただし、グローバル化をドグマのようにとらえ、みなにグローバル化を強いるのは的外れなのではないかということですが。

今後も、多くの人にとって、生活や仕事のほぼすべては国や地域の中で完結するはずですが。ある統計によれば、世界の9割の人は本国から出ないそうです。

だからこそ、無批判にグローバル化を受け入れるのではなく、どうすれば多くの人たちが、グローバル化をおそれず、幸せに暮らせるかを考え抜かなければならないのです。



Profile

NewsPicks編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」がある。